

Title	中國科學院文學研究所民間文學組主編, 李星華記錄整理, 『白族民間故事傳說集』
Sub Title	
Author	伊藤, 清司(Ito, Seiji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1961
Jtitle	史学 Vol.33, No.2 (1961. 2) ,p.130(252)- 133(255)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19610200-0130

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

を最初に明確に識別してキリスト教的ヨーロッパを世界の中心の座から追放し、歴史敘述にコペルニクスの革命をもたらしたこと、第二に歴史敘述において社會的經濟的文化的發展に他の如何なる先行者よりも重要な位置をあたえ、第三に歴史的懷疑主義の傳統をうけついで、自然科學の原理を歴史に適用したとの三つの點を著者はあげている。

勿論以上の三點について彼の限界も指摘されている。第一の點では、新しい普遍史の輪廓に盛るべき内容は不十分であり、成功しているとは言えない。第二では社會の歴史に作用する法則、メカニズムを發見しようとの思想的深さ、強靱さが無い。第三の點では、人間の心理の深さを看取る洞察力の缺除から、彼は歴史的懷疑主義の深みに入り込みすぎ、それが史料批判の技術的能力の不十分さと相俟つて、しばしば人間の心の本性とは矛盾しないような事象をも起り得ないものとし否定することとなつた。

何れにせよ近代歴史學に對するヴォルテールの貢獻は大きい。本書の著者は近代歴史敘述におけるヴォルテールの位置をボスエとテーヌ、ミシュレーとの間に置くことによつて歴史家ヴォルテールの研究を閉じている。

最後に若干の私見を挿むなら、ヴォルテールの先行者及び同時代人についての著者の該博な知識、又ヴォルテールの著作、その小論文、パンフレット類に到るまでの著者の刻明な探求がヴォルテールとその先行者との關係についての著者の見解を説得的なもの

にした反面、ヴォルテールの歴史敘述の積極的な要素が後世十九世紀の歴史家にどのように繼承されて行つたかについての兩者の關係を明らかにしようとする著者の意圖は成功していると言ひ難い。それ故、歴史家ヴォルテールの近代歴史學への貢獻を著者は説くが、更に多くの論證を要求されるのではなからうか。又近代歴史學へのヴォルテールの貢獻を言うなら、マイネッケが「歴史主義の成立」において強調した十八世紀前期ロマン主義とヴォルテールとの關係も言及されるべきではなかつたらうか。

しかし、本書のヴォルテール研究において有する意義の大なることは今更言うまでもない。

卷末に添えられた第一次史料、第二次史料のビブリオグラフィは極めて有益である。
(米田 治)

中國科學院文學研究所民間文學組主編
李星華記錄整理

『白族民間故事傳說集』

人民文學出版社
一九五九年九月刊

最近の中國における傳説・説話の類の研究および關係出版物の概況については、近く別に一文を編む予定であり、こゝでは重複の煩雜は避けるが、おそらく二・三百に達するこの種刊行物がこゝ數年の間に出版されたものと推定される。然もこうした傳説・説話集の取材する地域は黑龍江から海南島に及ぶ中國全土にわたる、その對象とされた民族も、いわゆる少數民族の殆んどすべて

を網羅しつつあつて、この方面の研究に關心をもつ者にとつてはこの景況は甚だ注視を惹くものがある。本書はそれら群書の一つであるが、資料の不足をかこつ西南中國の傳説類を收録した出版物の一つであると同時に、比較的よくまとめられた資料的價值に富む書であるという點から、とりわけ紹介の價值あるものと考えられる。

本書『白族民間故事傳説集』は、一九五八年秋、中國科學院文學研究所の派遣する雲南民間文學調查組が雲南西北の白族自治州を採訪し、白族の間に傳承される傳説・説話を蒐集整理し、翌五九年九月、北京において上梓したもので、これに採り上げられた作品数はすべて二七篇。

そも／＼白族、即ち民家族は大理・鄧川・洱源・劍川を中心に、今日約六十萬の人口を算えるといわれる少數民族であるが、早くから中國史書にも現われ、漢民族との接觸もすくなくないが、その民族的出自・系譜に關しては先刻來、論争の對象になつてゐることは周知の通りである。本書は先づ冒頭に「關於白族的幾點情況」と題する毛星氏の小論をのせ、白族住地の自然環境と彼らの經濟生活及び風俗慣習・宗教信仰・更に中國文献にみえる白族關係史料並びに漢民族との諸關係を概説し、彼らの傳説・説話の理解に便たらしめてゐる。この前文はもとより概説以上のものではなく、然も、些か學問的でない、意圖的な言辭も弄されてはいるが、數ある中國出版の少數民族民間故事集の中で、二五頁もの紙

面を費して當該民族の紹介をしているのは、本書のもつとも出色とするところであり、裨益するところ少くない。

さて、二七篇の傳説・説話中、先づ中國の古傳説との關係に注目されるものが少くない。即ち洱源採録の「開天辟地」の篇は文字通り天地創始・人類發生の神話であるが、いわゆる磐古傳説・洪水傳説の類型に屬するものである。また、「浪穹龍王的傳説」の篇の一つ「龍王原是殺鱗英雄」は同じく洱源地區の傳承であるが、その後半は晋の張華の『博物志』中の「昇仙谷」と殆んど一致するなど、白族の傳承の古さを示唆するものがあるが、然し、本書には輯録されてはいないが、別に彼らには漢族間に膾炙する「梁山伯和祝英臺的故事」など、（相當の改變はあるが）廣く流傳している模様であり、また各種傳説・説話中には佛教思想と並び儒教的色彩も認められるのであつて、漢・白兩族間に共通する説話類の問題は緻密にして慎重な究明が欲せられ所以である。つぎに、世界的に著名な赤頭巾の物語は中國では「狼外婆」・「熊外婆」等々の名で廣く分布し、西南中國の諸族の間にも散見するが、洱源・鄧川地區に傳えられる「葶麻與艾蒿」は葶麻いらくまと艾蒿よもぎが往々にして所を同じくして生育する由來を語つた植物説話であるが、その大半はこの赤頭巾型で構成されている。

雲南滇西の山間で、今日なお燒畑耕作を營むものの多い彼ら白族の間に傳えられる口承中で、特にわれ／＼の興味をよぶのは我が國の「繪姿女房譚」や「三人兄弟型譚」と同型の説話のみら

れる點である。例えば本書の「巧女」篇(洱源)は前者の型の説話であるが、この種説話は内容から推しても、それ程古い發生の説話とは考えられぬ。これが土地を異にして傳承されながら話の内容に殆んど變化のみられないのは、ストーリーの面白さ、奇拔さが作用しているのであるか。洱源の一老婆の語る「轆角庄」の傳説もまた日本の炭焼小五郎譚の白族版であつて、これは別に「三姐妹」の名で同地方で流布しているようである。

勿論、本書には「望夫雲」(一)(二)(共に大理)や「白蟒圍營」(劍川)「浪穹龍王的傳説」の一つ「龍王現原形」(洱源)のように白族住地の地形や彼らの歴史・社會生活に結びついた口傳も含まれている。またこの地方に伝えられる火把節の由來譚である「火把節」の傳説のように、彼らの年中行事の一端を察知することの出来る篇も一、二に止まらない。(尚、白族の北に接して住む納西族にも「火把節的由來」の傳説がある。但し、内容は白族のものとは全く異なる)しかし、二七篇を通覽して特に強く感じるのは、龍蛇に關する傳承の極めて顯著な點であろう。「アンドロメダ型」説話である「蝴蝶泉」(大理周城)及び、この類型に屬する「小黃龍」(大理)・「蛇骨塔」(大理)・「龍王原是个殺蟒英雄」(洱源)は申すまでもなく、「苳蘿湖的傳説」(洱源)・「白蟒圍營」・「白王打天下」(大理・洱源)・「羅刹」(大理)・「開天辟地」・「長生得寶」(鄧川)・「金龍報仇」(大理喜州)・「龍女三小妹」(洱源)・「珠虛壺」(劍川)はすべて龍蛇の登

場する傳説・説話でその數は本書の半ばに達する。

白族の滇西地區には洱海・苳蘿湖・劍湖等の彼らが「海子」とよぶ大湖をはじめ、大小の湖沼が點在し、河川がこれらを貫いて流れているが、この地方は極めて魚族にめぐまれ、その漁獲物の一部は、遠くビルマやインド、あるいはヴェトナムの地に輸出されているといわれるが、これら湖沼・河水に依存する生活とその氾濫の恐怖、そして一方では素朴な農耕生活等は、おのずから彼らの信仰を水↓龍蛇に結びつけているのであろうか。それにして、も彼らの傳説の類には海洋性に富むものが目立つのであつて、文化交流の觀點からの配慮もまた必要なものかもしれない。鄭紹堃氏は先般、白族に顯著なこの龍蛇信仰を問題とされたが、確かにこの究明は白族傳説・説話の位置づけに或る種の示唆を與える相異なる。しかし、隣接諸族にもこの傾向はあるのであつて、これには同時により廣範圍な比較研究がなされなければならないであろう。

本書には上述の通り毛星氏の白族の紹介を載せる外に、この書の記録整理の責任者である李星華氏の「關於白族的民間故事傳説」という二一頁の解説が跋文として付記されており、毛氏の前文と相俟つて本書の充實をはかつている。この點も裏表紙に申譯け程度の簡単な解説を付するに過ぎない他の類書に比して、本書の特色とするところある。たゞその解説は量的に卓越してはいるが、他書同様、類型的であり、採集者の立場が余りに前面に出すぎて

いるのは残念である。即ち一例をもつて示すならば、白娃公主が父王の反對を押して一炭焼の妻となる云々の「轆角庄」の口承を「柏節夫人」や「望夫雲」と共に「舊時代不合理的婚姻制度」に反抗する點を喧傳強調して「堅貞不屈人的傳説」の分類とするが如きがそれであるが、然し、この事はそも／＼現代中國における少數民族民間文學の研究の目的に立入る根本問題であつて、こゝに本書のみをとり上げて云々するのはもとより當を得ないことといふべきであらう。とまれそうした分類法に對する不滿は不滿としても、本書の解説は我々にとつて資料的價值が少くない。尙、この解説によれば、洱源地方に「鳥弔山」と呼ぶ傳承があつて、これは昔一對の鳳凰が羅坪山よりこの山頂に飛來して一片の羽毛を脱落して以來、毎歲舊曆九・十月の頃、西方より群鳥翔來して、その羽根を搜したずねる云々という傳説で、李氏も言及している通り、彼らの生活が野鳥の狩獵に深く結合している點を示唆するものがある。私が去る第十五回日本人類學會・日本民族學協會連合大會（於熊本）で言及した通り、西南中國の繪姿女房譚が我が國のそれと著しい類同を示しながら、只一點不思議な程に共通して示す差異があり、それは王宮に移つた妻君に遇いにゆく時の夫の姿が、中國の場合、鳥の羽根でつくつた衣であるという點なのである。これは白族の場合（巧女）ももとより同じである。（尙、廣東で採集された繪姿女房譚では山中に棄てられた孔雀の羽根で着物を作つてゐる）勿論、中國における當該説話の示す鳥の羽根

の衣というファクターをすべて狩獵生活の產物であると速斷するつもりは毛頭ないが、この型の説話が再三いう通り、日中間に支葉末節まで類同的であるだけに、この口承の傳播を考察する上に、着衣の材料をめぐる小差は無視し難い要素の如く思われるのである。

李氏の表現を借用すれば、一山一水、一草一木に到るまで白族の語り繼ぐ傳説があり、滇西の天地はまさに神話・傳説の海洋・寶庫であるという。従つてこゝに集められた二七篇はその極少にすぎないといえようが、その選擇は比較的多樣性にとみ、その採集地點と口述人とを明示していることと相俟つて、本書の資料性をよりあらしめている。A5版一六六頁 挿繪十二葉

（伊藤清司）